ヘウレーカ！ なるほど、そうか

第55回

ジュニア育成3

― イングランドに学ぶジュニア育成の制度設計 ―

喜田任紀

イングランドのジュニア育成の取り組みを紹介していますが、ふと思ったのです。問題の本質は育成プログラムではなくて、ジュニアを含めてゴルフ振興の捉え方、考え方であり、関係者の意識・情報共有にあるのだと。実はイングランドでも同じプロセスを踏んでいました。このイングランドの取り組みを理解するには、『Engaging Young People in Golf: a Delphi Expert Consensus Study』という報告書を読んでもらうことをお願いし、本稿では、イングランドがどのように若者とゴルフを結びつけている制度設計のプロセスを紹介します。

England GolfとThe Golf Foundationによる調査の目的と狙い

1．若年層のゴルフ離れに対する制度的応答

イングランド国内では、若年層のゴルフ参加率が長期的に低下傾向にあり、特に10代後半から20代前半にかけての継続率が課題とされています。

この調査は、**「なぜ若者がゴルフを始めないのか」「なぜ続かないのか」**という問いに対し、現場の専門家の知見を集約し、制度的な改善策を導き出すことを目的としています。

2．現場の知見を制度設計に反映させるための仕組みづくり

従来の政策や普及施策は、上意下達的なモデルが多く、現場の声が制度に反映されにくかったという指摘があります。そこで、England GolfとGolf Foundationは、**デルファイ法という合意形成手法を用いて、現場のプロコーチたちの経験と知恵を制度設計の言語に「翻訳」する**ことを狙ったわけです。これは、単なる意見収集ではなく、**制度の再設計に向けた障壁ともいえる〝文化的土壌〟を再設計するプロセス**です。

3．「競技人口の拡大」ではなく「文化の持続可能性」を重視

この調査の特徴は、短期的な参加者数の増加を目的とするのではなく、**ゴルフというスポーツを生活文化として根づかせるための構造的課題に焦点を当てている**点にあります。特に、家庭・学校・地域・クラブといった複数の接点を横断的につなぎながら、**若者がゴルフに関わり続けられる制度的・文化的条件を明らかにする**ことが狙いです。

4．制度の〝型〟ではなく、〝基本となる考え方〟を探る調査

England GolfとGolf Foundationは、他国の成功事例を模倣するのではなく、**イングランドという風土に合った制度の〝文化的土壌〟を探ること**を重視しています。

そのため、調査は「何をすべきか」だけでなく、「なぜそれが必要なのか」、「どのような文脈で機能するのか」という問いを含んでおり、**制度と文化の接点を探る構成**になっています。調査は、単なる普及策の検討ではなく、**若者とゴルフの関係性を再設計するための制度的・文化的探究**でした。このように、日本ではジュニア育成がイベント主導的である一方、イングラ

ンドは文化設計から入っていることがよくわかります。

England Golf とGolf Foundationは、**現場の声を制度に翻訳する仕組みをつくり、文化の持続可能性を支える制度の〝基本〟を探る**ことを目的として、調査を実施しました。

若者とゴルフをつなぐ制度設計——デルファイ法による専門家合意形成調査から見えてきたものとは

英国スポーツ政策研究の一環として実施された報告書『Engaging Young People in Golf: a Delphi Expert Consensus Study』は、若年層のゴルフ参加を促進するための制度的・文化的課題を、現場の専門家の知見を通じて明らかにしたものです。報告書からは、制度設計の視点の重要性が見えてきます。私には、まるで日本の現状へのアドバイスに思えます。特に、家族や地域を巻き込む文化設計の必要性、そして制度の〝余白〟をどう設計するかという問いを中心に据えたい。

デルファイ法という手法——制度設計のための〝土壌づくり〟

本研究は、スイスPGAが主催するジュニアコーチング・サミットに参加したプロコーチ29名を対象に、3回のラウンド形式でデルファイ法を用いて実施されました。デルファイ法とは、専門家の意見を匿名かつ反復的に収集・集約することで、合意形成を図る手法です。

この手法の特徴は、単なるアンケートではなく、**制度設計に必要な〝現場の知恵〟を言語化し、共有可能な形に整えるプロセス**にあります。研究では、以下の二つの問いを軸に専門家の意見が集められました：

・より多くの子どもや若者をゴルフに引き込むには何をすべきか？

・現在、参加を妨げている障壁は何か？

第1ラウンドでは自由記述、第2ラウンドでは提案の順位付け、第3ラウンドでは※リッカート尺度による評価が行われ、最終的に各問いに対してそれぞれ10項目ずつの優先事項を抽出しています。

このプロセスは、専門家の経験を制度設計の言語に翻訳する作業であり、**制度の〝型〟を押しつけるのではなく、〝制度の基盤を育て、継続を支える〟仕組みづくり**です。

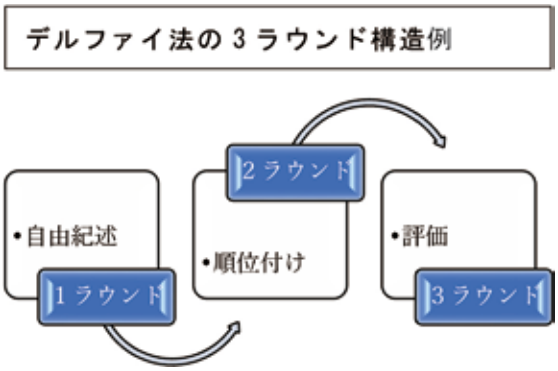

表1：子どものスポーツ参加に見られる特性の例

特性	説明	参考文献
特定のスポーツへの関心のパターン	子どもは多くのスポーツを「試し」、思春期を経て成人期へと進むにつれて徐々に専門化する傾向がある。	Côté & Vierimaa, 2014；Gulbin, Croser, Morley, 他；Strachan, Côté, & Deakin, 2009
プレイの動機	子どもの自己報告による動機は、主に（ほぼ例外なく）「楽しさ」の観点で表現される。ただし、楽しさの解釈は年齢とともに変化し、快楽主義的な解釈から技能習得を伴う解釈へと移行する。成人は文脈に応じた成果（健康、レクリエーション、競争など）により関心を示す傾向がある。	Collins, Bailey, Ford, 他, 2012；Dismore & Bailey, 2011；Visek, Achrati, Mannix, 他, 2015
注意戦略	子どもは「全体的」な注意戦略を用いる傾向があり、幼児期には過度に排他的、児童期後期には過度に包括的な戦略と関連している。	Bailey, 2012；Bjorklund, 2009
社会的影響要因	幼児期から児童期後期にかけては、スポーツ（およびその他のレクリエーション活動）への参加に影響を与える主な社会的要因は親や兄弟姉妹である。青年期から成人期にかけては、仲間がより強力な影響力を持つようになる。	Davison, 2004；Partridge, Brustad, & Stellino, 2008

若者を引き込むための提案

専門家によって最も支持された提案には、「ジュニアティーの設置」、「子ども専用エリアの

※リッカート尺度（Likert scale）とは、アンケートや調査で使われる評価の方法で、回答者がある意見や文に対して「どの程度そう思うか」を1～5といった段階的に答える形式のこと

表2：より多くの子どもや若者をゴルフに引き込むために必要な施策（Q1）

提案内容	加重平均値
ゴルフ場近隣に住む子どもをターゲットにする	8.47
すべてのコースにジュニアティーを設置する	8.16
クラブでジュニア用の用具を利用可能にする	7.79
「フレンズデー」など友人を誘うプロモーションを実施する	7.79
既存会員にジュニアをクラブへ連れてくるよう促す	7.47
学校をターゲットにする	7.32
短縮フォーマット（例：ホール数を減らす）を導入する	7.26
より速いプレースタイルのゴルフゲームを提供する	6.84
定期的なジュニア向けオープンデーを開催する	6.32
子ども専用のプレー・練習エリアを設ける	5.95

導入」、「クラブでの用具貸出」、「友人を誘うプロモーション」、「学校との連携」などが並んでいます。

これらは、単なる施策ではなく、**ゴルフクラブという制度空間を〝若者にとって意味のある場〟として再設計する試み**です。

特に注目すべきは、「友人との参加」や「既存会員による紹介」といった、**関係性を制度に組み込む視点**です。ゴルフ参加は個人の選択ではなく、社会的なつながりの中で育まれるという認識が、制度設計の前提として共有されています。

また、「少ないホール数制の導入」や「速いプレースタイルの提供」など、**競技の形式そのものを柔軟に設計し直す提案**も含まれており、18ホールといった〝型〟にこだわる意識の再考が求められています。

参加を妨げる障壁

一方、障壁として挙げられたのは、「友人がプレーしていない」、「移動手段の問題」、「クラブが歓迎的でない」、「費用への懸念」、「服装やエチケットの規則」などです。

これらは、ゴルフが持つ**文化的排他性**と、制度の**柔軟性の欠如**を浮き彫りにしています。

特に、ジュニアが単独で参加できない構造や、親が既存会員であることを前提とした推薦制度など、**家族の制度的関与が前提とされながらも、制度設計上は可視化されていない**点は重要です。

表3：子どもや若者のゴルフ参加を妨げる障壁（Q2）

障壁の内容	加重平均値
友人がプレーしていない	5.63
移動手段の問題	5.58
ゴルフがこの国では人気のあるスポーツではない	5.53
ゴルフクラブが子どもに対して歓迎的でない	5.42
ゴルフの一般的なイメージ／偏見	5.42
費用に関する認識	5.37
子どもがすぐにコースに出られない	5.11
クラブの規則（服装・騒音・エチケットなど）	5.11
ゴルフは楽しくないという認識	5.11
ゴルフクラブがジュニア向けに設計されていない	5.05

たとえば、12歳未満のジュニアが親の同行なしにプレーすることは難しく、親子での会員費は年間１０００ポンド（約20万円）も必要です。これは、**家族の経済的・時間的余裕が制度参加の前提とされている**ことを意味します。

また、悪天候時に親が子どもを屋外に出すことに消極的だという調査結果もあり、**家庭の判断が参加機会を左右する構造**が制度の外側に存在しています。

コーチの役割――制度と文化の媒介者として

報告書では、コーチの役割が繰り返し強調されています。コーチは単なる技術指導者ではなく、**子ども・空間・制度をつなぐ調整役**であり、文化の担い手です。彼らは、セッションの構成、参加者のニーズ、学習と発達の要素を統括し、制度と家庭の間に橋をかける存在です。

しかし同時に、コーチが活動する文脈――クラブの文化や制度――が硬直的である限り、その役割は制限される。

特に女子ジュニアに対する排除的な慣行が温存されている場合、コーチの工夫だけでは限界がある。それでもなお、コーチはその文脈の中で、若者の経験をより良いものにするために工夫を重ねています。

制度設計の視点から――家族と地域を巻き込む文化設計へ

報告書は、**制度の〝型〟を示すものではなく、制度の〝基盤〟を育てるための考え方**を提唱しています。

日本の課題に照らして考えると、制度設計の視点から見れば、次のような補足的要素が導き出せます：

・ゴルフ場や練習場を「地域クラブ」として再定義し、学校教育ではなく生活文化の場として位置づける

・家族単位での参加設計（登録、イベント、空間整備）を制度の前提に据える

・プロを「文化の媒介者」として制度に組み込み、家庭との接点を持たせる

年間に10人のジュニアを育てる地域クラブが全国に広がれば、ゴルフ場だけでも年間に2万人の新規ジュニアが誕生し、家族の巻き込みによって倍々ゲームの文化の連鎖が始まります。

この構想は、報告書の内容と矛盾するものではなく、むしろその延長線上にあります。

デルファイ法が示したのは、制度の硬直性を打ち破るためには、**現場の知恵を制度設計の言語に翻訳する仕組みが必要**だということです。

文化は柔軟な枠組みから育つ

「サッカーママ」「草野球パパ・ママ」といった存在が、競技の文化を家庭に根づかせ、地域に広げてきたように、ゴルフにも**〝文化の担い手〟を育てる制度設計**が必要です。それは、業界内の施策だけでは達成できません。家庭・地域・教育・遊びの文脈を巻き込んだ、**関係性の醸成**が求められています。

仮に全国のゴルフ場や練習場が「地域クラブ」として機能すれば、子供の両親がゴルフに関心を持ち、ゴルフを始めれば、さらに多くの新規ゴルファーが加わることになります。この家族単位の関与が継続すれば、翌年にはその家庭が友人や兄弟を誘い、**文化的連鎖が広がることで、持続的な発展の可能性が見えてきます。**

このモデルの本質的な狙いには、「数」ではなく「関係性の継承」にこそ、仕組みの持続性にあるのです。ゴルフを〝競技〟としてではなく、〝生活文化〟として根づかせるには、**制度の対象を個人から家族へ、そして地域へと広げる設計が不可欠**ということだといえます。

報告書を読んでほしい

『Engaging Young People in Golf』は、単なる調査報告ではありません。制度と文化の再設計に向けた提案書であり、**現場の知恵を制度設計の言語に翻訳する試み**です。

デルファイ法という手法は、専門家の経験を集約し、制度の硬直性を打ち破るための〝思考〟を整理し、そしてそこから導き出されるのは、ゴルフという文化・関係性・価値観の三層を同時に育てる制度設計です。この報告書を読むことは、制度の〝型〟を学ぶことではなく、制度の〝基盤〟を育てる思考に触れることです。誌面の都合で報告書の全文（訳）を紹介できませんが、私のウェブサイトに掲載してありますので、制度設計に関心のある読者にこそ読んでいただきたい。その提案が、イングランドゴルフとゴルフ財団の報告書にまとめられています。

この原稿を書いているタイミングで、ＪＧＡから「コミュニティゴルフ」のパイロット事業（鹿沼グループ）が発表されました。その内容は、イングランドの『Junior Journey』の理念を踏まえたものといってよいでしょう。このパイロット事業の成功は、制度設計にかかっています。大切なのは、制度を模倣することではなく、それを社会文化として定着させることです。日本のゴルフ振興にとって本当に必要なことを、自らの手で考え、形にしていくことが求められています。形だけを真似ても、文化は育ちません。制度設計とは、仕組みを作ることではなく、文化を支える〝考え方〟を形にする大切な試みなのです。

Engaging Young People in Golf: A Delphi Expert Consensus Study | Published in International Journal of Golf Science全訳文（原文のURLは全訳文の最後に表記）